

② 地域に広がる学習の場

幸ヶ谷小学校の総合活動

中里和正・宮武三郎

一——総合活動と地域

①—総合活動とその目指しているもの

「子どもとは、本来的にやる気に満ち能動的な存在であり、絶えず何かを求め、考え、実行している。子どもは生きていく限り、全生活を通して何かを獲得しながら自分を高めていく存在である」。こうした考え方で子どもを見ていこうとする時、子どもにとっての「学習」も教室、教科書といったものを離れ子ども自身が生きていく場、生活している空間へと広げられていく。総合活動では、このような児童観、学習観を背景に、教科や学習内容にとらわれず子ども一人ひとりの生活に根ざしたところから活動の素材をさぐり、子どもの興味・関心を活動への意欲へと転換させて目的的、体験的な活動を子どもと教師が共に創り出している。

自らの生活に根ざした問題は子ども達にとってまさしく切実な問題であり、それらは必要感に支えられて総合的に問題解決が図られてい

く。そうした時、子ども達は自分をとりまく環境に主体的にかかわっていったといえるのである。総合活動の目指しているのも、そうした「自然・社会・歴史的な環境に対して、能動的に働きかける主体的・創造的人間の育成」にある。

②—総合活動の題材と地域

もちろん総合活動に取り組むに当たって、子ども達が何かに興味を抱けば、それがそのまま題材になるわけではない。教師が、また子ども達同士が題材の価値と活動の見通しを吟味した上で学級全体の願いへと高められた時、初めて題材は成立するのである。

では、子ども達は自らの生活の場からどんな題材を取り上げるのであろうか。そこには子ども一人ひとりの興味関心の違い、生活経験の違い、発達段階の差など個性のぶつかり合いがある。動植物の飼育・栽培に関心のある子、鉄道や自動車に興味のある子、学区の歴史を調べたい子等々。しかし、いずれにしても子ども達の

- 一——総合活動と地域
- 二——昔の子どもをたずねて」の実践から
- 三——「ぼくらのまちの東神奈川公園づくり」の実践から
- 四——まとめ

生活の場から取り上げられるのであるから、子ども達の目は自分をとりまく環境、暮らしている「まち」に向けられることが多くなる。

教科学習との関連もあって、新学期には学校の外へ出ていくことが多い。「春をさがしにいきましょう」「学区の探検にでかけよう」「地域の地図を作ってみよう」。こうしてまちへとび出した子ども達は、様々な発見と疑問を抱えて教室にもどってくる。これが総合活動の題材へとつながることも多かった。総合活動自体が直接体験を重視し、本物を指向する以上、また、学習の場を開放し地域を巻き込んだ学習の展開を目指している以上、総合活動は地域との密接な関係の上に成り立っているのである。以降、具体例をあげてみよう。

③—今までの活動事例

・昭和五十九年度

○下水処理場の見学からぼく達にも滝の川の汚れた水をきれいにできないかと考えた「水処理

器づくり」(四年)

○『このまちにはお寺が多いよ』『ぼくの家は昔海だったんだって』こんな疑問から生れた「学区の立体地図づくり」(五年)

○『ぼく達は自分の住んでいるまちをいかに知らないか』気づいた子ども達による「幸ヶ谷がイドブックづくり」(五、六年)

○クラスに習っている子どもがいることから始まり、『地域に昔から伝わるものを大切にしたい』という気持ちを育てた「子安浜のお囃子を発表しよう」(六年)

・昭和六十年

○学区の地図づくりで商店街を調べていた子ども達は、店の人々とかかわりの中からこのまちの古さとこれからの商店街の姿に思いをめぐらし、商店街に役立つものを作ろうと考えた。

「商店街の案内表示板づくり」(三年)

○地域に残る伝説に心ひかれ、昔のまちの様子を想像しながら新しい民話の創作にはげんだ『滝の川浦島かっぱ』をつくろう」(三年)

○おじいさんからうかがった昔の話をもとに昔の遊びを調べ、昔のまちにいた子ども達の姿を再現する劇を仕上げた「昔の子どもをたずねて」(四年)

○地域に点在する歴史的な事象を子どもひとりひとりの興味に基づき調べ上げ、それを物語に

まとめた「歴史物語『権現山は語る』づくり」

(五、六年)

○「学区の立体地図づくり」の活動中に見つけた小さな石碑。調べていくとこのまちと日本の歴史の大きな接点の発見となった「横浜開港と岩瀬忠震」(六年)

・昭和六十一年

○植物さがし、夏祭りなど身近な自然、社会に目を向け、遊びを通して地域にふれていった「幸ヶ谷季節さがし」(一年)

○『昔の滝の川は泳げるくらいきれいだったんだって』このイメージがふくらみ、川をきれいにした子ども達は「金魚のすめる水」を目指して動き出した。「滝の川の水を追いかけて」(三年)

○かっぱの昔話をおばあさんからうかがい、それをもとに影絵づくりに取り組んだ「かっぱの昔話」(三年)

○『滝の川は流れる方向がおかしいよ』この気づきから流れなくなった滝の川と昔の自然な姿へ思いを深めていった「滝の川の今と昔」(四年)

○『公園づくり』に子ども達の声を。市役所の働きかけにとびついた子ども達の公園の見方の変容。「ぼくらのまちの東神奈川公園づくり」

(五、六年)

○学区にもある『横浜はじめて物語』。地域の歴史調べから生まれた「鉄道とアイスクリーム」(アイスクリーム)の資料館づくり」(六年)

このように、地域に目を向けた題材は年々増えていく。幸ヶ谷の学区が、こうした活動に耐えるだけの豊富な素材にめぐまれていることも、その理由の一つである。古くは源頼朝ゆかりの神社や戦国の古戦場を始め、東海道神奈川宿でもあり、開国の舞台ともなった歴史的環境。中央市場やYCAT、海沿いの工場群や横浜駅に隣接する商業地域、国道一号と一五号の合流する青木橋や首都高速といった社会的環境。自然環境には恵まれないが多くの公園もある。

しかし、地域をあつかった題材が増えていった理由は、地域題材は、活動を展開する上で最も大切なものの一つである「場」をもっている。

否、「場」そのものであるということにある。つまり、本物指向、現場指向ができるわけである。しかも、その「場」こそ、子ども達がそれまで暮らして来た、そしてこれからも暮らして行くであろう自分達のまちなのだから、活動への意欲を高める点からも地域題材は総合活動にふさわしい題材のひとつと言える。

では、地域を題材に活動に取り組んでいる子ども達の姿を、いくつかの題材でもう少し詳しく追ってみよう。

二 「昔の子どもをたずねて」の実践から

① 昔さがしのきっかけ

「この跡は何だろう」「ぼく達の頃はあったのかなあ」「もしかしたら手すりのついていた跡じゃないの」。旧校舎のスロープが写っている一枚の写真をめぐって子ども達は話題の箇所の謎解きに興味を集中していった。

私達人間は、日常たくさん物や事に触れて生活している。しかし、それ等がいかに身近であつてもそのことに関わらないと見過ごしてしまつたり、通り過ぎてしまうことが多い。日常見慣れている事物・事象を子ども達の興味・関心の視野に入り込ませるには、何らかのきっかけやその物をじっくり見るために立ち止まり、あるいは教師の働きかけが必要になってくる。

一枚の写真をめぐる話し合いは、最も身近なところにあるが、普段見過ごしていた事に疑問を抱き、いつ頃、何のために取り外されたのかという原因追求にのり出すきっかけをつくつた。また、他にもそのような興味ある事実がないだろうかと視野を広げ動き出すきっかけともなった。写真は教師が昔さがしのきっかけとして提示したものであるが、一枚の写真の手すり跡に疑問を持った子ども達のつづやきが、他の子ども達の関心をひきよせ、多面的に検討された。

そしてそれを実証するために聞き込みという四年にふさわしい調査方法を見つけ、動き出していったのである。

結局、子ども達の聞き込み調査からはその理由ははっきりせず、戦争で鉄が不足し供出させられたのだからという推測に落ち着いたのであるが、自分達の身の回りや町に目を向け聞き込むことよつて自らの疑問が解決できたり、新たな事実を発見する喜びを味わつたり、また昔という未知なる興味ある世界に出会える体験を実感していったのである。

「防空ごうがあるって」「探検してみたいな」「さがそう」「ネコ炬燵をみつけたよ」「どのよりに使つたのかな」「滝の川にカッパがいたんだって」「その話を聞いてみたいな」。子ども達にとつて自分達の町を自らの足を使って聞き出し、自分にとつて新しい事実を発見することはことのほかうれしく、胸をときめかすものであることが彼らの動きや目の輝きからうかがうことができた。

② 町の昔をより身近なものに

その後、子ども達の足によつて町の昔の聞き込みが続けられていった。そしてそれらが教室の中での話題として語られていった。古老を招いて町の昔の話もうかがつた。戦争の様子やそ

の理由に関心を向けた子どもも多かった。

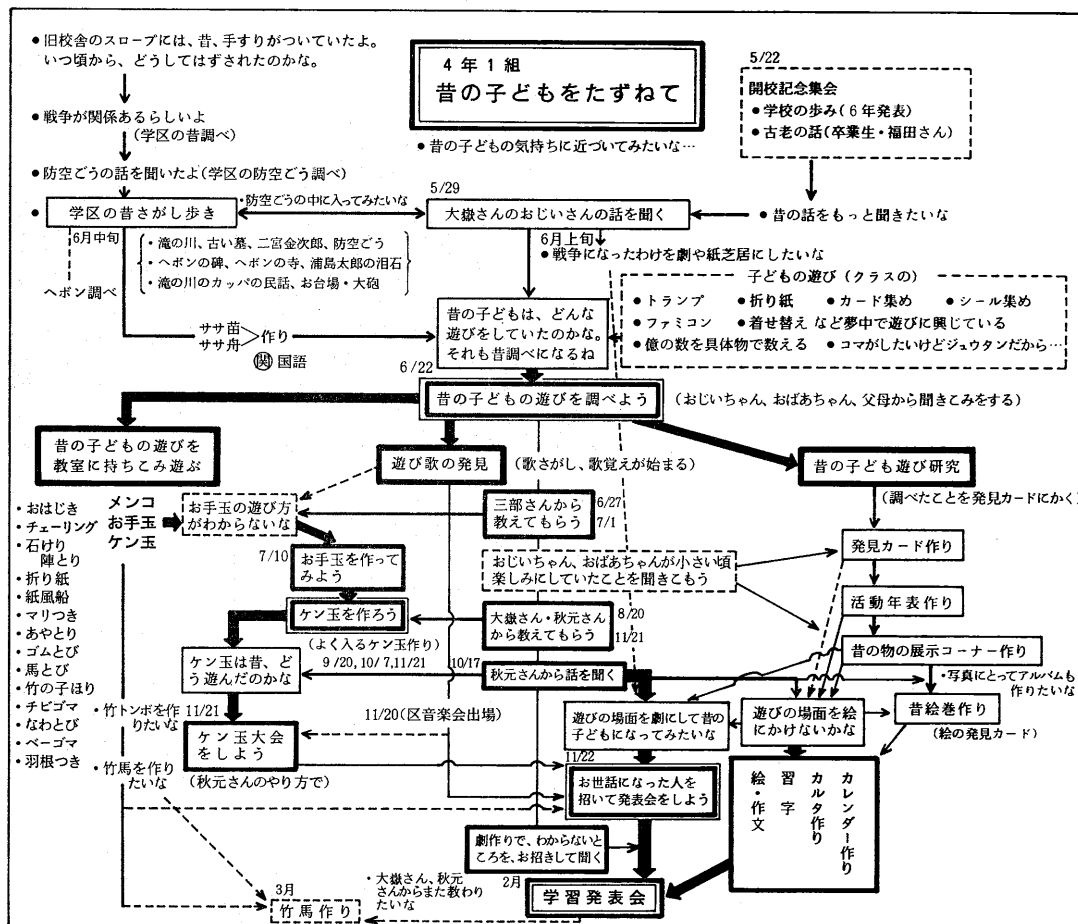
しかし、子ども達は町の昔の素材を断片的にたくさん聞き込んでくるがそれだけに留まり、活動をつなげたり、広げたりする姿勢を見せなくなつていった。そのことは、子ども達の興味・関心はもはや町の昔さがしや昔調べでは満足できず、町の昔を自分の中にとり込み心理的にもっと身近なものにしたいという願いが内側に高まつたためだと考えられる。

E子は「昔の子ども達の遊び調べになるね」と昔調べに方向づけをし、自分も昔の遊びを体験して楽しみたいと具体的に目的を持ち出したのである。

そのことよつて、メンコ、おはじきなど、それぞれ思い思いの遊びが教室に持ち込まれ、遊びが展開されていった。新しい発見は「発見カード」に書かれ朝の会で発表されて共通の関心事として結集されたり、また新たな追求へと活動を広げていった(図-1参照)。

それは、題材が子どもにとつて親しみやすく、遊びについて祖父母、父母から容易に取材が出来る、教えてもらつたりするなどして工夫し、ねばり強く取り組むことができるからである。そしてそのことは子ども達にとつて目的であり、次々とめあてを生み出し連続的な追求や活動が可能であるからでもある。

図-1 活動の流れ



遊びを調べていくうちに子ども達は遊び歌を
発見した。遊び歌をさがし、歌う中で当時の子
どものくらしや様子、時代背景にまで関心が広
がっていった。そしてO夫は「昔の子どもはど
れも自分で作って遊んだのかな」。K子は「昔の
子どもは、どういう気持ちで遊んだのかな」。U
子は「昔の子どもの気持ちになつて、昔を劇で
再現してみたい」というような強い願いに変わ
って行くのである。

自分達がよく知っている友達のおじいちゃん
やおばあちゃんから、お手玉や竹のケン玉、竹
馬の作り方、そして遊び方を教わり、遊び歌を
歌いながら当時のやり方で何度も試みる。大好
きで仲よくなったおじいちゃんおばあちゃんか
らは、昔の様子やエピソードも語られて、子ど
も達は自分のことのように目を輝かせて聞き入
る姿が見られた。

それらの活動の積み上げによって、町の昔は
自分にとってつながりのある関わりの深いもの
として子どもの心に情意を伴って昔の子どもに
同化していこうとしているのである。

③ 昔の子どもになりきるS子

今までの自分達の活動を劇で再現することに
なった。題は「昔の子どもをたずねて」。

その劇の中でS子は自分のおじいちゃん母

写真一 「昔の子どもをたずねて」発表会



親ヨネ役をやり、子守りの合間に近所の友達とお手玉をする場面を演じた。S子は家の人や親戚まででかけ当時のくらしぶりや遊び、服装、言葉づかいまで聞き込んでいる。

発表会当日、S子はヨネ役を演じている最中に思わず涙ぐんでしまった。遊びたくても遊ぶべず家の手伝いの合間をぬって遊ぶヨネに対し、自分の今のくらしとを比べ、自分とつながりをもつ昔の子どもに心を寄せ、共感した姿として

見ることが出来る。

S子にとって昔の子どもをたずねる体験は単に知識としてではなく、情意を伴った昔への理解と言えるであろう。

三——「ぼくらのまちの東神奈川公園づくり」の実践から

①—活動にむかう子ども達の思い

『東神奈川公園の改修工事に子ども達の声を反映させては?』との呼び掛けが都市デザイン室の方からあったのは、昨年度のはじめのことだったが、子ども達の反応は一樣に興味を示しながらも、様々なものだった。

——公園をアスレチックみたいにして、設計図をかいいて、わたしたちがつくった公園で思い切り遊びたい。(M・H)

——設計図をかいいてそれが本物の公園になるなんてうれしい。(M・K)

——小さい子が一時間位遊んでもまだ楽しいくらい公園を作りたい。(S・A)

——前から公園にトランポリンやアスレチックを作ってもらいたかった。(Y・O)

——自分達が使う公園なんだから、自分達が使いやすい公園を作りたい。(T・S)

——もっとおもしろい公園をつくって、人気の

ある公園にしたい。(K・K)

——公園の模型を作ったり、広さを測ったりして設計図を作りたい。(T・Y)

——いつも公園がつまらないと思っていたから、みんなに楽しんでもらえるおもしろい公園にしたいと思う。(T・S)

どこか「夢の公園」のようなものを思い描いている子、公園完成までの活動に意欲を感じている子、現実の公園の姿を思い浮かべている子、こうした違いは、興味・関心の違いでもあるが、こうした違いは、興味・関心の違いでもあるが、また公園や遊びに対するとらえ方や経験の違いでもある。こうした思いがぶつかり合い、互いに深め合いながら公園づくりは活動として位置づいていった。

②—活動を方向づける

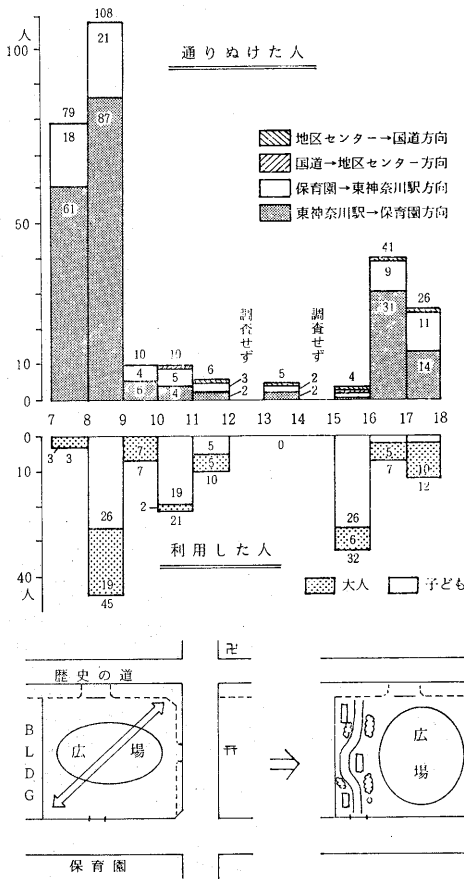
公園づくりに取り組むことになっても、一人ひとりがそれぞれのこだわりの中で公園を思い描き、それをぶつけあっても話は進まない。そこで、子ども達に題材名について考えさせることで活動に方向性をもたせ、「何を柱に公園づくりを考えていけばいいのか」を明らかにさせていった。

——「公園づくりって言うけど、公園って?」

——東神奈川公園だよ。

——ぼくらの東神奈川公園だな。

図一 東神奈川公園通行人調査



「ぼくらってだれのこと？」
 クラスのみんな。
 保育園の子たちだって公園を使ってるよ。
 町の人たちだって利用してるよ。
 公園を利用する人みんなだね。
 こうして題材名は『ぼくらのまちの東神奈川公園をつくらう』となったが、話し合いの間には「東神奈川公園は、今それほど利用されていない」という意見が出され、「それならみんなはどこで遊んでいるか調べてみよう」「東神奈川公園はどんな人がどんなふうに使っているかも調べてみよう」といくつかの取り組みも考え

出された。
 こうして題材名を考えることによって、子ども達の中に新しい視点が生まれてきた。つまり、「利用者（の一人）」としてとらえた公園『ぼくらの公園』という主観的な公園への視点に対して、「利用者や公園にかかわる人々のことを考えた公園『まちの公園』という社会的な公園への視点が見られるようになったのである。子ども達はこのふたつの視点から公園づくりをとらえ直し、その重なり合うところに目指す公園の姿を見つけようとしていったのである。

③—活動をを通してのとらえの変化
 実際の設計に入るまでに、子ども達は公園とまちを見つめる様々な活動を展開していった。手始めは、学区周辺の公園めぐり。おもしろそうな遊具やその使われ方を調べに十数箇所の公園に遊びにでかけた。その結果、学級全体ばかりでなく子どもが個人的にでかけた先でも公園を見に行くようになった。同時にいろいろな調査活動が取り組まれたが、そのひとつひとつを通して、遊び・公園・まちを新しい視点からとらえ直していった。
 ○「学区の遊び場調べ」では、幸ヶ谷では公園が多い割に利用されていないこと、危ない場所ほどよく遊ばれていること、遊べそうなところはどこでも遊んでいて、町全体が遊び場として使われていることに気づいた。
 ○「家族へのアンケート」「全校児童へのアンケート」「公園利用者へのインタビュー」等の聞き込み活動では、公園への希望が多様なこと、アスレチックに人気があること、低学年は遊具で遊ぶことが多いが高学年はボール遊びが多いことなどがわかった。
 どれも、子ども達がすでに生活の中で知っていることなのだが、こうした調査活動を通してそれらの事実が公園づくりの条件として子ども達の中に改めて位置づけられた。

その中でも特に子ども達が改めて意識させられたのは、公園を通りぬける人の多さだった。公園には道としての役割もあることも気づいていたし、東神奈川公園で遊んでいるとよく人が横切っていたが、公園で実際にその人数を調べてみると驚くべき数だった(図―2参照)。これでは思うように広場を使って遊べない、そう思った子ども達は解決策として公園の西側に歩道を設けることを考えた(図―3参照)。まさしく調査活動が公園づくりの条件になったのだ。

こうした活動により子ども達は公園をさらに社会的、客観的にとらえるようになり、まちを見つめる目も深まっていった。一方、現場で活動していくと自体が子ども一人ひとりの中に別の変化をもたらした。公園への愛着心の深まりである。公園の掃除をした時の感想に次のようなものがある。

○「今日、公園の掃除をしました。K君とAさんとY君とわたしで、ブランコの辺りをとってきれいなままです。しょうけん命掃除しました。ブランコの辺りだけでなく歴史の道の方も掃除しました。掃除している時、『公園がきれいになれば、みんなが来てくれる』とわくわくしながらやりました。そうするととてもうれしくて掃除もとっても楽しくなりました。みんな

写真一 2 東神奈川公園の模型を囲む子どもたち

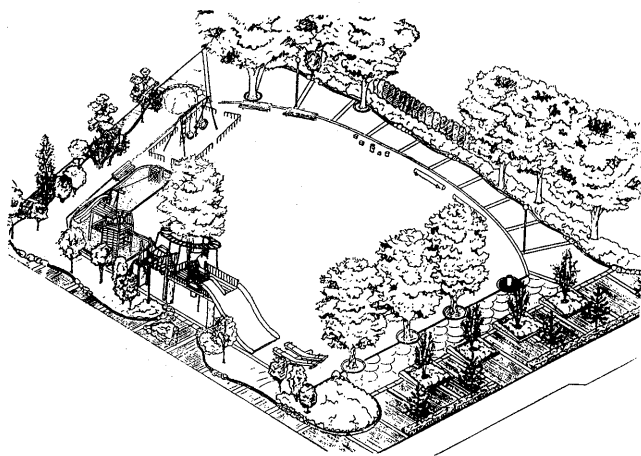


な来てくれるといいな。現場での活動は、子どもの情意心情を高めぼくらの公園への愛着心を深めていった。

④―視野の広がり

様々な活動から子ども達は公園に対する見方を幅広いものにしていったが、その視野を大きく開いたのは公園づくりの行政担当者・緑政局公園施設課の人とのやりとりであった。ぼくらに実際どれだけのことがやらせてもら

図一 3 東神奈川公園完成予定図



えるのか。その時どんなことが条件となるのか。どんなことはできないのか。今までの活動の中で知ったまちの人々の願いも含めて子ども達は聞きたいことだらけだった。さらに、事前に公園と周辺の基礎工事の設計図と完成予想図も届けられ、担当者との一回目の話し合いは子どもからの質問攻めだった。

―妹が公園にプールを作ってほしいと言っているんですが、できますか。
―インタビュウをしたら、池があればいいと

いつていたのですが。

——噴水があるときれいな公園になると思うんですけどできますか。

——トイレがほしいという人がたくさんいたんですけどどうですか。

こうした類の質問には公園の管理や安全の話の後でこういう答えが返ってきた。『プールに入りたいた時は学校のプールを使ってほしい。池や噴水が見たければ反町公園に行つてほしい。トイレに行きたければ近くの地区センターで借りてほしい』。やや強引な論理だが、子ども達もこの話で納得した。『なんでもこの公園に置こうと考えるのではなくどんな公園を作れば東神奈川公園らしいのかを考えてほしい』。単に東神奈川公園を夢の公園にしていくのではなく、自分達が暮らしているまち全体の中での東神奈川公園を作つていこうという考えに至ったのである。

⑤—活動の現状と問題点

緑政局の人との話し合いから、公園づくりのポイントを

○「歴史の道」との空間的つながりをくずさないような遊具の配置にする。

○今ある植物などはなるべく生かしていく。

○アスレチック風な自然な感じにする。

として、今までの活動の成果を公園の設計という具体物に具現化する作業になったが、これは難行した。しかし、壁にぶつかるとに緑政局の人にアドバイスをいただいて一年がかりでなんとか第一次の案が完成した。さらに緑政局の人や地域の人々と検討を重ねていくことになるが、子ども達は今までの活動に満足し、それなりに自負するものがあるようだ。完成の暁には、開園式をするのだとはりきっている。

しかし、この公園造りの活動に何の問題もないわけではない。一つには、子どもにどこまでやらせるのかという問題がある。このことには時間的な問題と内容の問題がある。時間の問題は内容を限定したり地域で取り組めば解決するが、内容面でどこまで子どもにやらせるかは難しい問題である。時として大人の利害や社会それ自体が持っている矛盾を子どもに背負わせることになってしまうからである。

また、行政側の子どもに対する位置や姿勢も問題であろう。ここまでは自分の責任で、ここから先は子どもの自由であつて絶対に口をはさまないという一線をはずきりと引く必要がある。なぜなら子どもには、公園を作ってくれる人のいうことが絶対者の声のように聞こえてしまうことがあるからだ。

こうした問題もワークショップ方式のまちづ

くりが解決しているであろうが、子どもが最初にイメージした公園からいまだに離れられないように、私も時々「子どもの作りたいと思うままの公園がつくれればなあ」と考えてしまう。

四—まとめ

子どもが総合活動でまちを見つめていく時、それを支えているものは、子ども達に有機的にかかわっている地域である。地域題材を学習する場合も、地域を客観的に調べただけでは発展的な活動へつながりにくい。そこにくらしている人々に子どもがかかわつていった時、子どもの内側に情意としての学習がかたちづくられ、それが学習意欲となつて活動を押し進めていくことが多い。

先にだされた臨教審の最終答申でも教育改革の方針の中で、「教育環境」の人間化をうち出したが総合活動を支えているのもまさしくそれである。学校、地域、家庭、行政を問わず子どもをとりまくすべての教育環境としての人間が子どもの動きを見守り、保障していくことが、子どものまちを見つめる目を育てていくのである。

△神奈川区幸ヶ谷小学校教諭▽